

秋山 学（人文社会科学研究所 准教授）

千光寺

東大通りに面する筑波大学のT字門から約3.5キロ北上すると、大曾根地区に入る。この地区に静かなたたずまいを見せるのが庭星山千光寺、慈覚大師円仁（794-864）の開創と伝えられる天台宗の古刹である。



千光寺本堂

天安2（858）年、現つくば市小田の山頂に創建され、建仁元（1201）年に常陸守護の八田知家（1142-1218）が中興した。知家から数えて第4代の小田時知（1293没）は、建長4（1252）年に初めて鎌倉幕府に出仕するが、その同年、西大寺の叡尊（1201-1290）の弟子である忍性（1217-1303）が小田の三村山に入り、以降10年ばかりにわたって当地で戒律復興運動が展開される。一方鎌倉では文応元（1260）年ごろ、執権の評定衆であった北条実時（1224-1276）が金沢称名寺を建て、弘長2（1262）年には叡尊に東国下向を請ずるとともに、称名寺に文永4（1267）年、審海律師を招き、真言律宗による開山を果たしている。忍性は叡尊の下向に伴い筑波を離れることになるが、こうして北条氏に協力した小田氏は真言宗に帰依し、領内にあった寺に改宗を迫った。千光寺はこれを拒否したため、現在の地に移されたという。その後天正14（1586）年、おそらく千妙寺第14世亮信（後述）の手で千光寺の再興が行われ、この頃千妙寺の系列に入ったものと思われる。

現在千光寺に参拝すると「東睿山千妙寺 比叡山南光坊兼帯 大僧正亮樹坦海」の筆による「庭星山」の額が掲げられているが、この坦海師とは千妙寺第64世、平成4（1992）年7月に示寂された僧正である。こうして千光寺は、比叡山・東睿山からの法統を継ぐとともに、中世戒律復興の余波を受け、現在の地に『妙法蓮華経』の説く久遠実成の釈迦如来を伝えているのである。

千妙寺

一方東睿山千妙寺は、つくば市の北西、筑西市黒子地区の名刹である。関東鉄道の黒子駅から東に500mほどのところに位置し、現在では美しい庭園を前にして、威容を誇る客殿と、その右側に総本堂を構えるだけであるが、往時は末寺・門徒寺あわせて600余を擁する巨刹であった。開創はやはり円仁によると伝えられ、承和年間（834-848）、現筑西市の赤浜に創建された承和寺が、清和天皇（在位858-876）の勅願を機に大恩寺と改められ、さらに観応2（1351）年、北朝崇光天皇（在位1348-1352）の勅によりこの黒子の地に移されたという。そのときの中興第一世亮守は、一字一石に『妙法蓮華経』一千部を書写し境内に埋めたとされ、これが寺名となった。亮守は台密（天台密教）・三昧流伝法灌頂の次第をこの地に伝え、以降この寺は東国における台密の中心道場として栄える。



千妙寺客殿

史上二度にわたり、この寺は重要な役割を帯びることになる。まず明応8（1499）年、比叡山が前將軍足利義種（在位1490-1493）と現將軍足利義澄（在位1494-1508）の争いに巻き込まれ、戒壇院を残して全山焼失した後、第165世天台座主尊鎮（1504-1550）の示寂とともに三昧流が断絶する危機に陥った。そのため覚恕親王（青蓮院准后）は千妙寺第10世亮珍に付法を依頼し、亮珍は天文22（1553）年、上洛して五瓶灌頂の法を伝え、この危機を救った。続いて元亀2（1571）年、織田信長（1534-1582）による叡山焼き討ちに伴い、再び三昧流は断絶の危機に見舞われる。本能寺の変（1582）の後、豊臣秀吉（1536-1598）が叡山再興に転じたため、天正12（1584）年、座主に補任された青蓮院尊朝法親王の許に千妙寺第14世亮信が上洛し、法流を伝えている。こうして現在、三昧流による灌頂の法は、比叡山以外ではこの千妙寺にのみ伝えられているのである。